

# フェイズと日本語の副詞の分布\*

水 野 江依子

The aim of this paper is to examine the distribution of adverbs in Japanese from the minimalist perspective. I have argued elsewhere (Mizuno 2010) that recent approaches to adverb licensing such as the specifier-based analysis of Cinque (1999) and the scope-based analysis of Ernst (2002) are problematic; as an alternative, I proposed a phase-based analysis and explained the distribution of adverbs in English. In this paper, I point out that the specifier-based analysis is also problematic for the distribution of adverbs in Japanese and argue that the phase-based analysis holds for the distribution of adverbs in Japanese. Furthermore, it is shown that the licenser *Mod<sub>epistemic</sub>* is closely related to the functional head *Top*.

## 1. はじめに

副詞研究における論点の一つに、(1) で示したようなその比較的自由的な分布を統語的にどのように統一的に説明できるかというものがあり、これまで様々な提案がなされてきた。

- (1) a. *Probably* they will have read the book.
- b. They *probably* will have read the book.
- c. They will *probably* have read the book.
- d. \*They will have *probably* read the book.
- e. \*They will have read the book *probably*.

なかでも1990年代後半からは (2) で示した指定辞分析が主流となってきて

おり、英語、イタリア語など様々な言語においてその妥当性が検証されている (cf. Alexiadou 1997, Cinque 1999, Laenzlinger 2004, Haumann 2007)。

## (2) 指定辞分析 (Specifier-based analysis)

副詞は意味的に関連する機能範疇主要部の指定辞に生起し認可される。

一方、日本語の副詞研究の関心の多くは、それぞれの副詞がもつ意味や機能のより詳細な記述にあり、生成文法的な観点から体系的に議論されているものは数少ない。近年になって、Endo (2007, 2009, 2010) がカートグラフィの研究の一環として日本語の副詞の分布に対するミニマリスト的考察を行っているが、副詞の認可システムそのもの、つまり日本語の副詞を指定辞分析で行うことの是非に関する詳細な議論はされていない。

本論の目的は、日本語の副詞の分布が他の印欧諸語と同様にミニマリスト的な観点から説明が可能であるということを示すことである。具体的には、指定辞分析に代わる代案として Mizuno (2010) が提案し、英語の副詞について検証を行った (3) のフェイズ分析を用いて日本語の副詞の分布について検証し、その妥当性を示すことである。

## (3) フェイズ分析 (Phase-based analysis)

副詞は、意味的に関連する機能範疇主要部にフェイズ領域で局所的にc統御されることによって認可される。 (cf. Mizuno 2010)

本論では、日本語学では一般的に陳述副詞と呼ばれている「話者の心的態度 (判断や評価) を表す文副詞」を対象として扱うこととする。

(4) おそらく、たぶん、きっと、幸いにも、不幸にも、不思議にも、珍しくも…

本論の構成は以下のとおりである。2節では、指定辞分析が英語だけでなく日本語の副詞の分布においても問題があることを指摘する。3節では、Mizuno (2010) で提案したフェイズに基づく副詞の認可システムを概観し、4節ではこのフェイズ分析が日本語の副詞の分布の説明に妥当であるか検証

をする。5節は結語である。

## 2. 指定辞分析の問題点

(2) で示した指定辞分析は1990年代後半から特に着目された副詞の認可システムで、具体的には (5) で示したように副詞は意味的に関連する機能範疇主要部の指定辞に生起することで認可される、というものである。

- (5) [*Frankly* Moodspeech act [*surprisingly* Moodevaluative [*allegedly* Moodevidential [*probably* Modepistemic [*once* T (Past) ..... [*usually* Asphabitual ... (Cinque 1999: 77)

しかしながらこの分析には様々な問題があることも指摘されている。例えば副詞の位置が厳密に固定されるので、(1) で示した副詞の自由な分布を説明するためには (6b-c) で示したように副詞以外の要素、すなわち、主語や動詞を移動させなければならない

- (6) a. [ModP *Probably* Modepistemic [they will have read the book]]  
b. They<sub>i</sub> [ModP *probably* Modepistemic [t<sub>i</sub> will have read the book]]  
c. They<sub>i</sub> will<sub>i</sub> [ModP *probably* Modepistemic [t<sub>i</sub> t<sub>j</sub> have read the book]]

ところが、このような随意的な移動に対しては、移動の駆動要因が曖昧であるといった問題が指摘されている (cf. Ernst 2002, Costa 2004)。

かき混ぜ等があり比較的移動が自由であると思われる日本語においても、指定辞分析は適切なものではない。(7a-b) で示したように、日本語の認識様態副詞は主語、目的語の前に生起することはできるが、(7c) で示したように目的語と動詞の間に生起することはできない。

- (7) a. 多分 太郎 {は／が} その本を 読んだ。  
 b. 太郎 {は／が} 多分 その本を 読んだ。  
 c. ??太郎 {は／が} その本を 多分 読んだ。

(7c) の容認可能性については、話者よっての判断が分かれるところだと思いが、かなり落ち着いた悪い文ではある。野田 (1984) はこの位置に生起する日本語の認識様態副詞は完全に不適格であると判断している。また、小泉・玉岡 (2006) の文解析の実験によると、(7a-b) の誤答率 (非文であると答えた学生) がそれぞれ 1%、4%であったのに対し、(7c) については 17%弱と大幅に増えている。実際、筆者も言語学を専門としない大学学部生に認識様態副詞「多分」の位置について書かせたところ 15人中 13 人が (7a) の文を書き、(7c) の文を書いたのは 2 名のみであった。野田のようにアスタリスクをつけるほどの不適格文ではないにせよ、完全に容認可能な文でないようだ。従って、本論では (7c) の文を不適格な文として議論したい。

では、指定辞分析を使って具体的に分析してみよう。

- (8) a. [ModP 多分 [TP 太郎が その本を 読んだ] Modepistemic]  
 b. 太郎が<sub>i</sub>; [ModP 多分 [TP *t<sub>i</sub>* その本を読んだ] Modepistemic]

例えば、(7a) の「多分」が (8a) のように認可子の指定辞位置にあるため適格であると説明するならば、(7b) の語順を得るためには、英語と同様、主語の移動が要求される。しかしながら Saito (1985) によると、主文の主格主語の移動はないとされており、そもそもこの移動が不適格であることになる。また仮に移動があったとしても、今度は随意的な移動という問題が残ってしまう。

指定辞分析を使って副詞の分布を説明する別の方法として、副詞そのものを移動させるという方法があるかもしれない。すなわち、副詞は指定辞位置で認可された後移動をする、というものだ。その場合、今度は (7b) が基本語順で (9a) で示したように、認可子は TP の下にあると考えられる。そして (7a) は (9b) で示したように、副詞が指定辞位置から顕在的に移動することによって派生される。

- (9) a. [TP 太郎が [ModP 多分 [vP その本を読んだ] Mod] T]  
 b. 多分<sub>i</sub> [TP 太郎が [ModP t<sub>i</sub> [vP その本を読んだ] Mod] T]

副詞の移動の可能性については、Endo (2007: 206) が論じている。彼によれば、(10) で示したような文頭にある VP 副詞「すぐに」は、VP 指定辞で認可されたあと、topic-chain を形成するために頭在的に移動している、というものだ。

- (10) すぐに 太郎は 拾ったお金を 交番に 届けた。 (Endo 2007: 206)

VP 副詞が移動することは可能性として排除できない。例えば (10) の文を従属節に埋め込み、「すぐに」を文頭にもってきた (11) の文を考えてみよう。

- (11) すぐに<sub>i</sub> メアリーは [太郎が 拾った お金を 交番に t<sub>i</sub> 届けた] と思った。  
 (i) すぐに C メアリーは思った (主節動詞句の修飾)  
 (ii) すぐに C 太郎が拾ったお金を交番に届けた (従属節動詞句の修飾)

この場合、「すぐに」は主節か従属節の二つのうちどちらでも修飾する解釈ができる。従属節での解釈が可能ということは従属節内の VP 指定辞で認可されたあと文頭へ移動した、と考えることによって説明することが可能であろう。

しかしながら全ての副詞が移動できるかどうかについては問題が残るであろう。例えば (12) において、多分、が修飾するのは従属節を含む文全体であって、従属節の命題のみを修飾するという解釈にはならない。

- (12) 多分 太郎は [花子が その本を読んだ] と思った。  
 (i) 多分 C 太郎は (花子がその本を読んだ) と思った (文全体の修飾)  
 (ii) \*多分 C 花子がその本を読んだ (従属節の修飾)

もしこの副詞が移動可能であるならば、(11)と同様に従属節内の認可子によって認可されたあと文頭へ移動し、その結果(12ii)の解釈が可能となるはずである。しかし、実際はそのような解釈はできない。VP副詞の移動については議論の余地が残るが、少なくとも本論の対象となる認識様態副詞が移動するという分析は不適切であるように思われる。

以上、指定辞分析では日本語の副詞の分布について問題があるということ了指摘した。

### 3. 提案

#### 3. 1 フェイズに基づく副詞の認可システム

指定辞分析の問題点の根本的な原因は、副詞の併合される位置が厳密に決められている点であろう。その結果、副詞の自由な分布について説明をする場合、さまざまな要素の移動が必要となってくる。Mizuno (2010)ではその問題点を解決する代案としてフェイズに基づく副詞の認可システム(13)を提案した。

#### (13) Phase-based analysis of adverb licensing

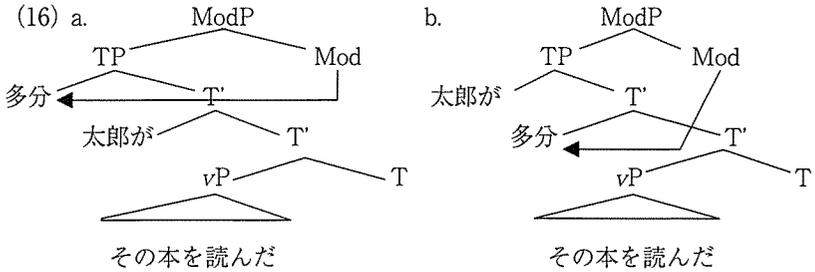
Adverbs are licensed when they are locally c-commanded by their licensors within a phase domain. (Mizuno (2010: 2))

Cinque (1999)に従い、ここで扱う文副詞の認可子は Modepistemic というモダルの特性をもつ機能範疇であると考ええる。

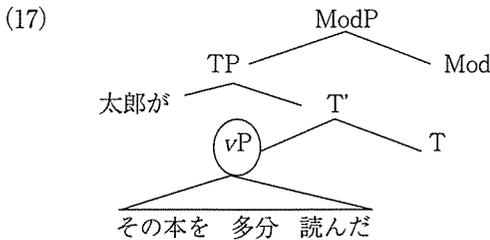
#### 3. 2 文の構造

近年、Rizzi (1997)やCinque (1999)の研究によって、文は非常に豊かな構造をもつことが明らかにされてきた。Rizzi (1997, 2004)の提案は(14a)で示したCP領域の構造についてなされたものであり、Cinque (1999, 2004)の提案は(14b)で示したようにTP領域の構造を豊かにしたもので、もともと両者は異なる領域にあるとされてきた。

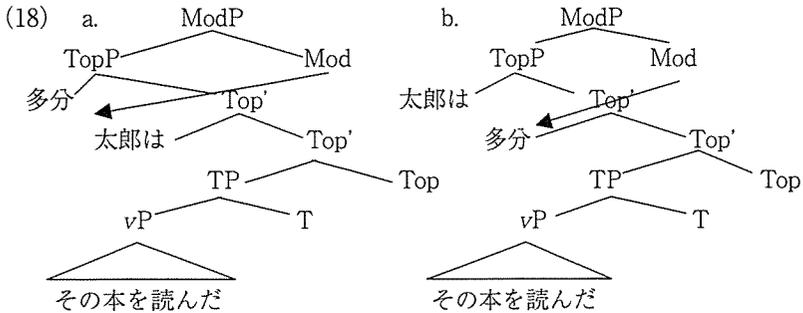




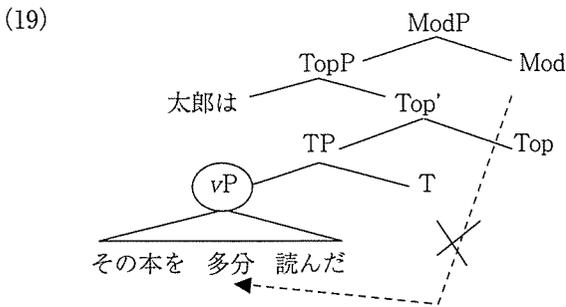
一方、副詞が目的語と動詞の間に現れる場合は (17) で示したように vP のフェイズ内に生起することになる。この位置は定義によりアクセス不可能なので副詞は認可されず容認不可能となる。



次に話題主語の場合について考察しよう。本稿では、Endo (2007) 等に従い、話題主語は TopP の指定辞に位置すると仮定する。そうすると文頭に現れる副詞は、(18a) で示したように TopP の指定辞位置に生起し上位の Mod によって c 統御のもと認可される。主語の後ろに生起する場合は、(18b) で示したように Top の内側の指定辞位置に併合され、これも適切に認可される。



目的語と動詞の間にある副詞は先と同様 vP フェイズ内にあるので認可できず非文となる。<sup>1</sup>



#### 4. 2 従属節

次に、従属節における日本語副詞の分布について考察しよう。

(20) で示すように、日本語の認識様態副詞は従属節内に生起可能である。しかしその場合の解釈は、従属節内の命題に対するものであって、文全体の命題に対するものではない。

(20) 太郎は [花子が 多分 その本を読んだ] と思った。

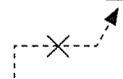
(i) 多分 c 花子がその本を読んだ

(ii) \*多分 c 太郎は (花子がその本を読んだ) と思った

この解釈は従属節内の Mod によって副詞が c 統御され、適切に認可される

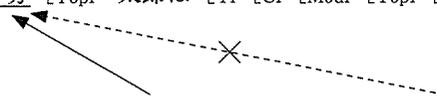
ことによって得られる。この場合 (21) で示したように従属節内に Mod が存在しているので主節の Mod は従属節内の副詞を局所的に c 統御することにはならず、認可することはできない。<sup>2</sup>

(21) [ModP [TopP 太郎は [TP [CP [ModP [TopP [TP 花子が 多分 その  
本を読んだ] Top] Mod] と] 思った] Top] Mod]



一方、(12) で示した「多分」が従属節内の命題を修飾する解釈ができないのは、(22) で示したように、それが従属節内の Mod より上位にあり c 統御されないためであると考えられる。

(22) [ModP 多分 [TopP 太郎は [TP [CP [ModP [TopP [TP 花子とその  
本を読んだ] Top] Mod] と] 思った] Top] Mod]



さて興味深いことに、全ての従属節が認識様態副詞と共起できるわけではない。例えば、(20) のト節を (23) で示したようにコト節にかえると、非文となる。

(23) \* [花子が 多分 その本を読んだ] こと は秘密だ。

また、接続助詞の違いによって、容認可能性に違いがでてくる。(24)-(27) の a で示したように独立した文においては適格な文も、それをそれぞれの接続助詞を用いて埋め込むと対応する (b) の文で示したように適格性に差が生じる。

- (24) a. 花子が 多分 先に帰った。  
 b. 花子が 多分 先に帰ったから、太郎は 1 人で犬を散歩に連れて行った。

- (25) a. 不幸なことに 花子は知らない。  
 b. 不幸なことに 花子は知らないだろうが、太郎はまだ酒を飲んでいる。
- (26) a. 雨が多分降るだろう。  
 b. \*雨が 多分 降るだろうなら、明日の試合は中止になるでしょう。
- (27) a. おそらく 花子が帰るだろう。  
 b. \*おそらく 花子が帰るだろうと、客が来ていた。

また (28) (29) で示したように、同じ接続助詞を使っても認識様態副詞が生起出来る場合とできない場合がある。

- (28) a. 太郎が給食当番をやって、次郎は世話係をやった。  
 b. 太郎が幸いなことに給食当番をやって、次郎は世話係をやった。
- (29) a. 春が来て、君はきれいになった。  
 b. \*春がおそらく来て、君はきれいになった。

さらに (30) で示したように、関係節においても認識様態副詞は生起できない。

- (30) a. \*太郎は、[花子が きっと 母親に 書いた 手紙] を読んだ。  
 b. \*これは、[彼が 幸い 最初に 読んだ 本] だ。

((b) : 森山 2000: 158)

本論ではこの認識様態副詞の生起の可否と話題主語の生起の可否の関連性に注目したい。よく知られているようにト節とコト節は補文中に話題主語が生起できるか否かで異なる(長谷川 2007)。(31a) で示したようにト節は話題主語が生起できるがコト節は共起できない。

- (31) a. 太郎は [由香 {が/は} 昨日 ボストンに出発した] と 思っている。  
 b. [由香 {が/\*は} 昨日 ボストンに出発した] こと は秘密だ。

接続助詞を用いた先の文も同様の対比が見られる。

- (32) a. 花子 {が/は} 先に帰ったから、太郎は1人で犬を散歩に連れて行った。  
 b. 花子 {が/は} 知らないだろうが、太郎はまだ酒を飲んでいる。  
 c. 太郎 {が/は} 給食当番をやって、次郎は整理係をやった。
- (33) a. 雨 {が/\*は} 降るようなら、明日の試合は中止になるでしょう。  
 b. 花子 {が/\*は} 帰るだろうと、客が来ていた。  
 c. 春 {が/\*は} 来て、君はきれいになった。

認識様態副詞と共起出来る文は、(32) で示したようにその主語を話題主語にすることができるが、認識様態副詞が生起できない文は (21) で示したように、話題主語にすることはできない。

関係節についても同様で、(34) で示したように話題主語が現れない。

- (34) a. 花子 {が/\*は} 母親に 書いた 手紙  
 b. 彼 {が/\*は} 最初に 読んだ 本

以上の点から、話題主語の生起と認識様態副詞の生起には (35) の一般化が成り立つと言えよう。

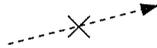
- (35) 話題主語「～は」が生起可能な従属節は、認識様態副詞と共起できる。

これについて、統語的観点から考えてみたい。先にみたように、日本語の話題主語は TopP の指定辞に生起し認可されると考えると、話題主語が生起できない文は、Top がない文であると仮定することが可能であろう。そして ModP と TopP は何らかの強い関係があって、TopP が投射される場合のみ ModP も存在すると仮定してみよう。

話題主語が生起可能な派生については、すでに (33) でも説明したが、他の場合も同様で、例えば (24) では TopP が投射されることから ModP も投射され、(36) の構造となる。この構造において副詞は従属節内の Mod に局所的に c 統御されるので容認可能となる。

- (36) [CP [ModP [TopP [TP 花子が 多分 先に帰った] Top] Mod] から]  
  
 [ModP [TopP 太郎は1人で犬を散歩に連れて行ったのだろう  
 Top] Mod]

認識様態副詞が生起できないコト節について見てみよう。ト節と異なりコト節は話題主語が存在できない。従って (37) に示したように従属節に Mod は投射されず、従属節内で副詞は適切に認可されない。

- (37) \* [ModP (CP [TP 由香が 多分 昨日ボストンに出発した] こと) は  
  
 秘密だ Mod]

では、介在する Mod がないので主節の Mod が局所的に従属節内の副詞を認可するのではないかと言う人がいるかもしれない。しかしながら、この場合は主節の Mod と副詞の間には、フェイズ CP が存在する。よって、フェイズを越えて認可できない、という本稿の主張のもとでは、主節の Mod も副詞を認可できず、結果として非文であることが説明できる。

同様の分析が (26) (27) (29) などの不適格な文について当てはまる。<sup>3</sup>

## 5. まとめと今後の課題

以上、本稿では従来の指定辞分析の問題点を指摘し、c 統御とフェイズというミニマリスト・プログラムの基本的なシステムを使ったフェイズ分析がどのように日本語の副詞の分布を説明するのか、ということを示した。また、Top と Mod には緊密な関係があることを示唆した。なぜ両者にそのような密接な関連があるのか、という根本的な説明までには踏み込まず議論としては不十分であるが、この点をさらに考察することによって両者の範疇の特性が明らかにされると予測されよう。今後の課題としたい。

## 注

\* 本稿は、日本言語学会第141回大会（於：東北大学）にて発表したものに加筆修正を加えたものである。

1. もし機能範疇 TopP が ModP より上位にあるとすると、(i) で示したように話題主語の前に生起する副詞が認可子 Mod よりも上位にあることになる。この位置では副詞が c 統御領域にないため誤って非文であると予測してしまう。  
(i) 多分 [TopP 太郎は [ModP [TP その本を読んだ] Mod] Top] (\*Top > Mod)  
従って、本分析が正しいとすれば (17) で示した階層の妥当性が支持される。
2. 従属節の CP フェイズが主節 Mod からの c 統御を阻止するためとも考えられる。従属節と主節のそれぞれに Mod があると言える証拠として、「多分太郎は、花子がきっとその本を読んだのだろう、と思ったはずだ。」という文が適格であることを挙げておく。
3. 長谷川 (2007: 352) は、ModP と TopP が投射されない場合は CP システムが存在せず、すなわちフェイズが形成されないと主張している。それが正しいとすると (37) は CP フェイズが存在せず、上位の Mod が従属節内の副詞を認可してしまい、誤って適格であると予測してしまう。しかしながら、関係節には、TopP が存在しないため上位の ModP も存在せず認識状態副詞が認可されない、ということではかの従属節と統一的に説明をしている。関係節は CP 領域を形成しないのか、という点、一般的に関係節で説明されている現象がうまく説明できない。従って ModP, TopP が無いとしても、CP 領域が存在しない、とは言えないであろう。

## 参考文献

- Alexiadou, Artemis (1997) *Adverb placement: A case study in antisymmetric syntax*. Amsterdam: John Benjamins.
- Chomsky, Noam (2000) Minimalist inquiries: The framework. In: Roger Martin, David Michaels, and Juan Uriagereka (eds.) *Step by step: Essays on Minimalist syntax in honor of Howard Lasnik*, 89-156. Cambridge, MA: MIT Press.
- Cinque, Guglielmo (1999) *Adverbs and functional heads: A cross-linguistic perspective*. Oxford and New York: Oxford University.
- Cinque, Guglielmo (2004) Issues in adverbial syntax. *Lingua* 114: 683-710.
- Costa, João (2004) A multifactorial approach to adverb placement: Assumptions, facts, and problems. *Lingua* 114: 711-753.
- Endo, Yoshio (2007) *Locality and information structure: A cartographic approach to Japanese*. Amsterdam: John Benjamins.
- 遠藤喜雄 (2009) 話し手と聞き手のカートグラフィー 『言語研究』 136: 93-120.
- 遠藤喜雄 (2010) ムードとモーダルのカートグラフィー *Scientific approaches to language* 9: 1-23.

- Ernst, Thomas (2002) *The syntax of adjuncts*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 長谷川信子 (2007) 「1 人称の省略：モダリティとクレル」『日本語の主文現象：統語構造とモダリティ』長谷川信子 (編) 331-370, 東京：ひつじ書房
- Haumann, Dagmar (2007) *Adverb licensing and clause structure in English*. Amsterdam: John Benjamins.
- Heycock, Caroline (2008) *Japanese -wa, -ga, and information structure*. In *The Oxford Handbook of Japanese Linguistics*, ed. by Shegeru Miyagawea and Mamoru Saito, 54-83. Oxford and New York: Oxford University Press.
- 井上和子 (2009) 生成文法と日本語研究：「文法」と「談話」の接点 東京：大修館
- 小泉政利 玉岡賀津雄 (2006) 文解析実験による日本語副詞類の基本語順の判定 *Cognitive Studies* 13, 392-403.
- Laenzlinger, Christoph (2004) A feature-based theory of adverb syntax. In: Jennifer R. Austin, Stephen Engelberg and Gisa Rauh (eds.) *Adverbials: The interplay between meaning, context, and syntactic structure*, 205-252. Amsterdam: John Benjamins.
- 南不二男 (1974) 現代日本語の構造 東京：大修館書店
- Mizuno, Eiko (2010) A phase-based analysis of adverb licensing. 『言語研究』137: 1-16.
- 森山卓郎 (2000) ここからはじまる日本語文法 東京：ひつじ書房
- Narrog, Heiko (2009) *Modality in Japanese: The layered structure of the clause and hierarchies of functional categories*. Amsterdam: John Benjamins.
- 野田尚史 (1984) 副詞の語順 『日本語教育』52: 79-90.
- Rizzi, Luigi (1997) The structure of the left periphery. In: Lillian Haegeman (ed.) *Elements of Grammar*, 281-337. Dordrecht: Kluwer.
- Rizzi, Luigi (2004) Locality and left periphery. In *Structures and beyond: The cartography of syntactic structures, volume 3*, ed. by Adriana Belletti, 223-251. Oxford: Oxford University Press.
- Saito, Mamoru (1985) *Some asymmetries in Japanese and their theoretical implications*. PhD dissertation, MIT.